

『グリム童話集』に学ぶもの

梶 田 絢 子

はじめに

『グリム童話集』の価値がどこにあり、なぜここまで世界中で、永きに渡って読まれているのかを、昔話を蒐集し、編纂したグリム兄弟の生い立ちと業績から考察した論文を書いた⁽¹⁾。それを通して、『グリム童話集』が昔話の古典といえるまでに研鑽を重ねられたことを見た。

それは、ヤーコプとヴィルヘルムがまだ少年時代、突然の父の死によって、残された母と幼い6人兄弟という困窮生活に陥った状況があった。上二人の兄弟が、父親に代わって一家を受けとめ、伯母や恩師、仲間にも助けられて世界的な学者となって前進してゆく姿は、昔話に登場する一番下の子供が冒険に勝利を収めていく姿を髣髴とさせるものであった。彼らの生き方そのものが『童話集』には満載されているといえる。

そればかりでなく、兄弟の言語学、文芸（献）学、法学（特にゲルマン法）、民俗学、メルヘン学という学識の広さと深さと徹底性という学問的背景が、『グリム童話集』を類まれな古典としたといえる。

ヤーコプ・グリムが兄弟の業績で最も価値のあるもの⁽²⁾ と言い、ヴィルヘルム・グリムが完成を目指して7度も改版した『グリム童話集』は、出版当初はそれほど売れず、評判にならなかった。しかし、200年近くの間、聖書に次ぐ多くの言語に翻訳・出版され⁽³⁾、特に兄弟の生誕200年祭をきっかけにさまざまな研究書が出版されて、グリム童話ブームを招来した。

グリム兄弟は『童話集』初版第1巻、第2巻にそれぞれ注釈をつけて出版しているが、友人・読者らの意見を下に、もっと子供向けにするため、第2版出版後、注釈編として独立した第3巻を出している⁽⁴⁾。こ

れは『グリム童話集』研究の起点となったとも言え、証言、文献、類話、その他の注釈、注解が含まれている。後の民俗学的・文芸学的・心理学的、およびその他の研究を、序文・本文とともに喚起していったのであるが、彼らこそその後の様ざまな研究の先達であったことを示しているともいえる。

『グリム童話集』が喚起した研究

『グリム童話集』からわたしたちは何を学べるのか。特に、『童話集』1、2版の序文に述べられていることと、多岐にわたる研究のうち、民族学、文芸学、心理学的研究が提起しているものを本論文では取り上げ、学際的性格を持っている昔話が人間学の面からも価値あるテキストであることをみていきたい。

民俗学からの提起

まず、初版で並置されている類話の問題がある。前述したように、兄弟は第2版から、それらを第3巻の『注釈本』に入れている。類話について、ヤーコブとヴィルヘルムは1、2版の序文でのべている。特に第2版の序文でヴィルヘルムは、類話があった場合は、「いちばんいい話を優先し、他の話は注釈書のためにとっておくことにしました。話ごとのこの差異は、精神の中にだけ存在する、くみつくすことのできない原型に、さまざまな道から接近しようとするころみにはかならない」⁽¹⁾として重要視している。

世界の昔話⁽²⁾を読めば、類話が色々な国にあることに気づく。兄弟もすでに分類を試みているが、最初から昔話にかかわっている民俗学は今なお、昔話を集めて分類し、分布を調べて起源をさぐろうとしている。アールネとトムスの『昔話の話型』(1961年)⁽³⁾は、その代表的

な成果といえる。

この昔話のカタログでは、昔話として、動物昔話、本格昔話、笑い話などを含め、2499の型に分け、それぞれの型の内容、モチーフ、類話を挙げ、参考文献が添えられている。昔話研究ではこの分類番号をつけて記するのが、国際的な習慣となっている。そのため、メルヘンのタイプという時、この二人のイニシャルをとって、例えば「赤ずきん」は「AT333（大食家）」と表示している。このAT分類によって他の様々な国の昔話との対応ができるようになった。

アールネ・トムソンの『昔話の話型』は昔話を次ぎのようなI～Vに分類している。

- I (1～299) 動物昔話
- II (300～1199) 本格昔話 (更にA～Dの4つの種類にわけられる)
 - A (300～749) 魔法昔話 (更に7つの項目に細分されています)
 - 〈1〉超自然の敵 〈2〉超自然の夫(妻)や近親者 〈3〉超自然の課題 〈4〉超自然の援助者 〈5〉呪物 〈6〉超自然の力または知識
 - 〈7〉その他の超自然的昔話
 - B (750～849) 宗教的昔話
 - C (850～999) 短編小説風昔話
 - D (1000～1199) 愚かな鬼の昔話
- III (1200～1999) 笑話と逸話
- IV (2000～2399) 形式昔話
- V (2400～2499) その他、分類できない昔話

私たちが知っているグリム童話で有名なもののはほとんどはこの分類のII Aの「魔法昔話」に属している。『グリム童話集』はドイツ語の題“*Kinder-und Haus Märchen*”の頭文字をとってKHMと表記され、第7版を基に作品番号が1～210番までついている。このKHMとAT対応表⁽⁴⁾もできている。

2004年、ドイツのゲッティンゲン大学のウター教授⁽⁵⁾は、プロップの業績（次章参照）も組み入れ、昔話の分類表を更によいものにして、3巻本⁽⁶⁾で、同じヘルシンキから出版している。これからはこの本の普及に従って「ATU○○○」と示すように徐々に変わっていくことと思われる。

序文ではないが、ヤーコブは、『言語の起源について』（1851年）と題された講演では、言語学と口承文芸の密接な関係を示唆し、「サンスクリット語の『完璧さと力強い規則』は、『最古の最も豊かな詩の世界』に道を拓き、その言語は、『語根と語形変化』の観点から見てアジアからヨーロッパへ到達し、欧州一帯を満たした」とし、これは、「メルヘンの移動理論の一つの発火点ともなった」⁽⁷⁾。ここから、民俗学は昔話の伝播についても研究しているが、決定的なことは出ていない。さらに、ヤーコブ・グリムは昔話が「原初のもっとも単純な生活と非常に近接」しているので、「ここに昔話の一般的な広がりがある」と考え、「昔話をまったく持たない民族というのは存在しない」としている⁽⁸⁾。これらから分かることは、昔話の発祥と伝播については、一箇所で発祥し伝播されたものと、多数の民族に発祥したものとがあると考えられることである。起源についての研究には、プロップの1946年『魔法昔話の起源』⁽⁹⁾があり、それは、各民族が持っていた成人の加入礼・イニシエーションから起こったことを、膨大な資料を駆使してあきらかにしている。これは非常に刺激的な研究である。

民俗学の分野では、今なお、世界中の昔話蒐集が進められ、それによって、何が昔話の根本構造か、どこが発生源か、どのように伝播されたのかが探求されており、さらに、世界中の学者によって明らかにされたことがどの程度蓋然性があるのか研鑽されている。私が日本民族学学会の学会に参加したときにも、沖縄、中国、スペインなどの研究者が発

表し、世界中の昔話に該当する分類がいかにしたら可能かが話し合われていた。ヤーコプ・グリムは言語の天才であったが、民俗学の研究者も多くの方が言語に秀でており、日々、昔話の収集を通した比較研究が活発に行われている現状にしばし遭遇出来た。

文芸学があきらかにしたこと

もう一つの研究は文芸学的方面からの研究である。ヤーコプに比べヴィルヘルムは文学により強い興味をもち、才能もあって、業績の中には中世文学発掘作品がめだつ。ヴィルヘルムが初版第2巻序文で「童話集はよりよいものになっています」と書いて以来、七度も改訂版を出しているが、そのより完全な形とは何かがこの研究分野からもみえる。メルヘン蒐集の方法を述べた箇所、「わたしたちは、なにひとつとして、かつてにつけくわえることはしなかったし、いいつたえの細部も、一連のできごとさえも美化することはせず、その内容を、わたしたちがきいたとおりに再現しました。表現と個々の表現の推敲は大部分わたしたちの手による、ということは当然」だが、「気がついたかぎりの特質を保持するようつとめ」⁽¹⁾ だと、書いている。表現についてはレレケ⁽²⁾の研究を見してみる。

グリム童話の研究家レレケは『グリム兄弟のメルヘン』で次のようにまとめている。兄弟が書き写し、聞き書きしたものを主にヴィルヘルムが書き下ろしたとしているが、方言からの、標準ドイツ語への変更だけでなく、当時、子どもの慰みものとして軽んじられ、文学に値しないつまらないものとされ、十分に評価されていなかったメルヘンを後世に残るものには書き換えたと指摘する。『グリム童話集』が「民衆の口から出た言葉を、一言一句忠実に再現したメモであったなら、当時いかなる興味もよびおこしえなかったであろう」(108～109頁)。それでは、メルヘンは今に伝えられなかったかもしれないのである。そうして徐々に、ヴィルヘルムの努力は実を結んでいく。当時の「ぎごちないメル

ヒェン様式の批判者達の機先を制するために、そして、教養人たちの間ではいまだに全く軽蔑されていたジャンルに、少なくともことばの美しさを与えるために、時として、全くたどたどしい口伝えのメルヒェン本来の調子をを超えて、他方では、高度な様式を持った近代の創作メルヒェンの語り口を超えて、全く新しいものが生まれ」(139頁)ていった、と。「ヴィルヘルム・グリムは、失われた、いろいろな角度から見て完全と信じられていたオリジナル性を探求しているうちに、彼自身の独特なメルヒェンの調子を発見したのである」(139頁)と、結論づけている。

昔話の特徴については、アクセル・オールリク⁽³⁾が「民間伝承の叙事詩的法則」(1909年の論文)で、次のような点を上げて注目され、研究が進んだ⁽⁴⁾。

- 〈1〉 くり返しの法則
- 〈2〉 三という数の優越
- 〈3〉 場面の統一性
- 〈4〉 対立の法則
- 〈5〉 最前部優先と最後部優先の法則
- 〈6〉 一線性
- 〈7〉 定型化の法則
- 〈8〉 性質は話の筋の中で表現される
- 〈9〉 主人公の中心性

これらの特徴のいくつかは素人でも比較的簡単に確認できるものである。

そして、マックス・リュティ⁽⁵⁾の様式理論が、それを一歩進めたものとされ、ヨーロッパの昔話の様式については、彼の理論でほぼ完成したと考えられている。リュティは、口承伝承の中で、神話・伝説・昔話・笑い話・動物昔話では相互に共通のモチーフを持っている。そのためモチーフでは昔話のジャンルを語ることはできず、モチーフの扱い方、その語り口にその特徴があることを研究した。

リュティはそれを「昔話はどんな材料でも簡潔にまとめ、純化してしまう様式形態を持った含世界性の冒険物語である」⁽⁶⁾として、次の5つの様式を上げている。

- 〈1〉 **一次元性** 主人公は次元を異にする存在に出会っても、びっくりしたりせず、平気で同次元に属する存在として関わっているのが伝説と全く違うところである。
- 〈2〉 **平面性** 昔話の登場人物には時間的なたての関係もなく、周囲の世界もない。感情や性質は筋として表現される。
- 〈3〉 **抽象的様式** 登場人物やものの形態、輪郭、材質（金属）、色彩（原色）、話のすじの記述法、公式、極端性、禁令、条件、奇跡、初めと終わりの決り文句、繰り返し、特定の数字、等である。
- 〈4〉 **孤立性** 昔話の様式の最も重要で決定的標識であり、支配的な普遍的結合を可能とさせるものである。
- 〈5〉 **純化と含世界性** あらゆる種類のモチーフをフィルターにかけて取り入れ、神話的あるいは伝説的モチーフをも純化し、孤立化して、抽象的様式に相応しい形を与えて自らの中に取り込んでいく。

この文芸学からの特徴は、実際の昔話に当て分析すると、それぞれの昔話にどのように表現されているかを具体的に知ることができる。これは昔話の面白さを味わう上で非常に役立つ。また、今読んでいるものが口承文芸のどのジャンルに当たるかも違いが鮮明に出てくるので、確認できる。

また、日本での昔話研究の第一人者とされる小澤俊夫氏は、更にこの語り口を、昔話はむしろ音楽に似ているとして、『昔話の語法』⁽⁷⁾を上梓し、その第5章「昔話の音楽的性質」に研究を記している。この本にはCDもつけられて、鈴木サツの独得な語り収録されてそれを証明している。

1969年、昔話の話型について、ロシアのウラジミール・プロップが

ATでは区別できない欠点を指摘し、昔話の話型は「互いに類似した話の構造上の特徴」の次元にあると考え、『昔話の形態学』⁽⁸⁾をあらわした。この本で、プロップは昔話というジャンルの中の、特に魔法昔話に絞って、その「文法」を明らかにしている。優れた語り手フィーマンに出会ったヴィルヘルムもすでに、このことを洞察していたのではないかと思われる。

魔法昔話は、構造からいうと、世界中に広く分布し、また時代も古くまで遡る「竜退治」の変形と考えられる。それで、彼は昔話では、登場人物の名前や属性が変わっても、果す役割、機能には変わらないことに着目し、アフナーシェフの昔話集（1855 - 63年）を用いて、昔話の構造を分析した。彼は魔法昔話に31の機能を見つけ、その機能と、継起順序は常に同一であり、すべての魔法昔話は単一のタイプに属することを明らかにし⁽⁹⁾、「魔法昔話は構造からいうと、ひとつのタイプしかない」という結論に達した。そしてそれを、次のような機能の連鎖として、図式化した。

A（記号）「加害」（定義以下同じ）、B「仲介・つなぎの段階」、C「対抗開始」、↑「出立」、D「贈与者の第一機能」、E「主人公の反応」、F「呪具の贈与・獲得」、G「二つの国の間の空間移動」、H「闘い」、J「標づけ」、I「勝利」、K「不幸・欠如の解消」、↓「帰還」、Pr「追跡」、Rs「救助」、O「気づかれざる到着」、L「不当な要求」、M「難題」、N「解決」、Q「発見・認知」、Ex「正体露見」、T「変身」、U「処罰」、W「結婚」

これは優れた分析であり、ロシアの昔話だけでなく、『グリム童話集』でも、日本の昔話その他知っている昔話にこの文法を当てはめてみると、どれにもよく該当し、昔話の面白さの特徴となっていることが分かる。

今後更に他の昔話の種類（例えば、動物昔話など）についてもこのよ

うな研究が可能なのかもしれない。

心理学からの貢献

更に最近多くの研究書が出ている分野は心理学からの研究である。「昔話が息づいているところでは……人は、話を知っていて、話を愛しています。……昔話は、文学に対する旺盛な感受性のあるところ……想像力のかき消されていないところにのみ存在します。……これほど多様に、そして繰り返し新たに楽しませるもの、心を動かし、おしえをあたえるものは、……永遠の泉より、湧き出たものに違いありません」と、グリム兄弟は初版の序で述べている⁽¹⁾。難しい理屈ではない。ごく単純な話をなぜ人はここまで愛するのか。

私が昔話の研究書で一番初めに読んだものは、ブルーノ・ベッテルハイムの『昔話の魔力』⁽²⁾という本である。ベッテルハイムはフロイド派の分析医で、自閉症児の研究をしている時、子どもらが注意深く聞く話は昔話であることを発見し、内向的に精神が閉じ込められている彼らが昔話を聴くことで解放されていくのを発見している。そこから彼は昔話の魔力を研究していった。

昔話の魔力とは何であろう。精神分析医たちは心の深層に昔話が語りかけるとしている。現在、昔話の研究に熱心なのはユング派の分析家たちである。彼らは昔話を夢分析への足がかりとして活用している。

ユング派の心理学者 M・L フォン・フランツは『おとぎ話の心理学』⁽³⁾で、ユング研究所において、なぜ昔話を研究するかに言及し、夢と昔話の近似性を指摘している。夢は、「内的事実の可能な最善の表現」⁽⁴⁾であり、心理的研究にとって欠かせない研究であるが、夢は移ろいやすく、断片的なことが多い。それに比べ、たくさんの昔話がそれを補ってくれる。そのため夢分析のために欠かせない研究として昔話研究が講義されているとしている。それを、「ユング博士はかつて、心の

比較解剖学を一番よく勉強できるのはおとぎ話においてである、といわれました。われわれは神話や伝説、あるいは他のもっとこみ入った神話的材料では、沢山の文化的資料を通して人間の心の基本的な形に達します。しかしおとぎ話では、特定の文化的意識的材料はそれ程多くありません。だからそれらは、心の基本的な型をいっそう明瞭に映しているのです。」⁽⁵⁾ といって、おとぎ話を通して、人間性の基本をはっきり見ることが出来ることを強調している。

女史は心理学的解釈の仕方を以下のように述べている⁽⁶⁾。

おとぎ話では、時と場所は「昔々、ある所に」という形が多い。この昔々は、「M・エリアーデによれば、現在ほとんどの神学者が、……時のない永遠性、今であり永遠……と呼んでおり、それを言い表わすさまざまな表現方法がある」と言っている。この出だしこそが、昔話を聴く人をして一瞬の内に夢物語の世界に連れて行く魔術的言葉といえる。

次いで女史はその昔話のテーマが何かを見るために、始めと終わりの登場人物の数を数えることを勧める。例えばもし物語が、「王様は三人の息子をもっていました」で始まれば、そこに四人の人物がいるが母親が欠けている。そして、その話が、息子の一人とその花嫁、兄弟の花嫁ともう一人の花嫁で終わるなら、再び同じ四人の人物だが組合せが違っている。はじめに母親が欠け、しまいに三人の女性がいるなら、「全体的話が女性原理の回復にかかわるもの、と考える」ことができると説明している。

もうひとつの特徴は、昔話はいつも物語の始めには何か面倒な問題が起こるが、それによって物語が進行する。この面倒が何であるかを理解しようとし、心理学的に把握する必要をのべる。

物語の展開は色々で、起伏の多いもの、あるいはたった一つの起伏しかないものもある。しかし必ず、クライマックス、決定的瞬間が来て、全体が悲劇になるか、めでたしめでたしになって終わる。

展開部分も「白雪姫」や「三本の金髪のある王女」のように三度も同じようにだまされる話は、聴く者に失敗を恐れたり責めないゆとりを与

えて物語を楽しませさえしている。また、グリム兄弟は序文で「教育の書」としたいことも書いているが、主人公の親切な心が援助者からの力を受けるに値する話が多いことは、知らず知らずの内によいことを愛する心を育む面もある。

「めでたし、めでたし」という話のおわり方も人々にどんなことがあっても希望を抱かせる力となる。しかも、おわりはそれだけでなく、おおくの昔話には二重の結末がある。昔話の二番目のおわりを女史は、「現実復帰の儀式」であるといっている。「なぜならおとぎ話は、留まってはならない集合的無意識の、子ども時代の夢の世界に人々を連れ去るから」、まったく違う一節の挿入によってその世界から現実に戻さなければならないからである。

昔話の心理的解釈は意識的にされるが、それがもし「人を生き生きさせるような効果をもち、満足な反応を生んで、人々に無意識の本能的な基底との折り合いをつけさせる」ことができるなら、それは昔話を聴くことでいつも引き起こされていたことと同じ結果を生むことになるとして、現在分析で使われている昔話の心理学的な解釈は、「私たちの語りの方」であると言っている。人々は単純に物語を聴きたいのである。

『グリム童話集』の序文で内容について、「たいていの状況は非常に単純で、日常生活の中に見つけうるものです。しかし、すべての実際の状況と同様に、それは常に新しく、人の心を打ちます。」⁽⁷⁾とあることを、ヴェレーナ・カーストは『おとぎ話にみる家族の深層』⁽⁸⁾の概論で、「メルヘンというものは大抵何らかの家族布置に基づいている」としている。それは一人の人間の成長のある状況で、成長の刺激となる困難が含まれているとフランツ女史と同様にいう。メルヘンの主人公たちはここから成長への道へと踏み出す。しかもその道は家族状況の中に生じていた不足を乗り越えて成長していくので、メルヘンの主人公のたどる道は人の成長過程のモデルとなると説明している。確かに昔話は主人公が王子様、お姫様でも、ごく普通の家庭の中の問題であることが多

い。そのため身近であり、親しみを持って受け取られる。

大切なことは、昔話がイメージで語られることとっている。イメージはイメージ、感情を喚起し、想像力を誘い出す。昔話が語りかけるのは論理的思考ではなく、全体的思考に対して語りかける。右脳の思考に語りかけるといふ。また、可能性を内に持つ神秘性への要求にも応じる。メルヘンの解決策は一笑に付されたり子どもっぽかったり、「退行的」とみなされることが多い。しかし、「退行と進歩は人間の生活の基本的リズム」であり、あらゆるものと結びつく対処の仕方をメルヘンは促すのであって、左脳の思考ではないとむすんでいる。

カーストはメルヘン解釈の方法論的背景を次のように要約する⁽⁹⁾。

- 〈1〉 メルヘンは人間に普遍的な問題と、その可能な解決法とを象徴的に描いている。
- 〈2〉 メルヘンは常に、生の進展を脅かすものを扱う。普通、それはメルヘンの冒頭に出る。そこからどの様に成長の道が生まれ、新しい状況に入れるかを示す。回り道や危険や失敗が隠れているが、これは、成長過程で私たちに脅かす危険と同じである。
- 〈3〉 それゆえ主人公はモデルとみなす。主人公は問題状況に耐え、その解決に必要な道を歩く。
- 〈4〉 心理学では古いメルヘンを多く用いる。それは、人間の典型的な問題が典型的な方法で乗り越えられているからである。メルヘンはすべて語りの伝統に基づいていて、その利点は、長い間語り継がれていく内に多くの偶然が生じ、多くの人に当てはめうるイメージや物語を伝えるようになった。現代のものはまだ個人的特徴を取り去れていない。このように繰り返されたイメージの意味は決して説明し尽くされない。よく知られたメルヘンは、それを読むとき大人もしばしば子供時代に帰ることができる。
- 〈5〉 解釈が成功したか否かは、物語の特定の個所に関する解釈一つ一つが全体として調和がとれており、解釈が刺激的で、反対意

見を喚起するようなときである。「正しい」解釈はどこにもない。

- 〈6〉 また、メルヘンと親しむ方法は、心理的解釈だけでなくイメージを想像し、瞑想し、形や、劇にすることも大切な親しみ方としている。

心理学的な考察で大切なことは、物語の主人公との同一化による問題解決の過程であることが分かる。これが、難しくなく、物語を聴くという、子どもから大人まで、健康であろうが病んでいようが誰にでも可能な、単純な中に成し遂げられることが、また、人に与える喜びの純粋性が昔話のもつ魔力ともいえる力であろう。

おわりに

グリム兄弟の業績が数ある中で、『グリム童話集』は最も後世に影響を与えたものである。ヤーコヴはこのことを「ヴィルヘルム追悼講演」⁽¹⁾の中で次のように述べている。「もし私たちがはらった労苦に対して、私たちの死後も生き残るような報酬を得るとすれば、それは昔話の収集に対してであります。これは若い人たちや、公平な読者にとって尽きせぬ糧となるばかりか、熟読玩味してあきらかになったのですが、研究にとっても欠くべからざる、偉大な古代の宝をうちに秘めています」⁽²⁾と、言ってこの講演を締めくくっているが、文献学者としてのヤーコヴがその膨大な研究体験から読み取った予言ともいえる言葉であり、それは現実となっているといえよう。

人間学では一般に考えることを大切にするが、最近の社会の状況から、もっと実践的なワークショップ、映像を通しての理解の必要性を痛感している。目で読むことより、耳で聞くことを本然としている語りの文学である昔話は、ただ考えることではなく、初版の序文にもあるよう

に、感性を育て、人間性全体に働きかける力がある。これは、聴く話と、読む話の違いと言える。学生は、読み聞かせをすると想像の世界に入り、そこで主人公に同化しながら冒険を辿る。波乱万丈の冒険を経験し、生きる力が強められるようである。ヴィルヘルムが『グリム童話集』を教育の書としたように、学生が、昔話を聞くことによって、倫理観や、純粋な子どもの心を取り戻したりしていることを知った。人間を全体的に育てようとするなら、特に現代において、この感性の教育は意義深く、有益である。

現在はどの学問分野でも学際的な研究が必要となり、様々な分野で総合的な見方が重視されているが、わずかではあるが本論文で見えてきたように、昔話は人間の成長に総合的な側面から働きかけ、それこそ「むかしむかし」から、人に働きかけていたテキストと考えられる。

注

はじめに

- (1) 『人間学紀要』2006年12月20日発行
- (2) 『グリム兄弟』(ドイツ・ロマン派全集第2期15)、国書刊行会、1989・4・20 p.157
- (3) 高橋健二『グリム兄弟』新潮社、1999年、pp.10-11、まえがき注(1)参照。
- (4) 小澤俊夫訳『完訳 グリム童話集Ⅱ』(ぎょうせい、1985年)解説、p.490

グリム童話集が喚起したもの

民俗学からの提起

- (1) 小澤俊夫訳『完訳 グリム童話集Ⅱ』第2版序文、p.480
- (2) 小澤俊夫訳編『世界の民話 全25巻』(ぎょうせい、1979年完結)他、参照。

- (3) Aarne, A. & Thompson, S. “*The Types of the Folktale*”. Helsinki, 1961. FFC184
- ・アンティ・アールネ（1867～1925年）はフィンランドの民俗学者で、1910年、ヨーロッパで採集された約800の昔話を分類し、民俗学者連盟の機関誌『民俗学者連盟通報』第3号に「昔話の話型」を発表した。
 - ・スティス・トムソンはアメリカの民俗学者。アールネの分類はヨーロッパ以外に該当しないため、これを補い、拡大した。
- (4) 高木昌史『グリム童話を読む辞典』（三交社、2002年）「類話対応表」、「KHM/AT対応表」他、参照。
- (5) Hans-Joerg Uther (1944～) ドゥイスブルク＝エッセン大学ドイツ文学教授、ゲッティンゲンの“*Enzyklopaedie des Märchens*”編集首席メンバー、“*Die Märchen der Weltliteratur*”シリーズの前編集長。歴史比較研究に特に興味をもっており、伝承、民衆文学分野の突出した学者で、伝説や昔話の50以上の本を編集した。それらの中にはグリム兄弟（1996, 2004）、ウィルヘルム・ハウフ（1999）、そして、ルードヴィッヒ・ベッヒシュタイン（1998）の評論版があり、ドイツ語、英語、その他の言語で多数の記事を書いている。
- (6) Hans-Joerg Uther “*The Types of International Folktales Part 1 ~ 3*” ACADEMIA SCIENTIARUM FENNICA, HELSINKI, 2004
- (7) 「グリム兄弟の知的遺産」（『ユリイカ 特集・グリム童話』青土社、1999年）p.114
- (8) 『初版グリム童話①』（白水社、1997年）序文、p.15
- (9) ウラジミール・プロップ『魔法昔話の起源』せりか書房、1983年

文芸学があきらかにしたこと

- (1) 前掲書『完訳グリム童話Ⅱ』第2版序文、p.480

- (2) ハインツ・レレケ『グリム兄弟のメルヒェン』岩波書店、1990年
- (3) アクセル・オールリック (1864～1917年) デンマークの民俗学者、スカンジナビアの民謡および神話を研究した。主著“*Om Ragnarok*” 1902年、“*Nordisk Aandsliv*” 1907年 (岩波書店『西洋人名事典』、1981年より)
- (4) 小澤俊夫『昔話入門』(ぎょうせい) p.37 参照。
- (5) マックス・リュティ (1909～) はスイスの首都ベルンに生まれ、1928年から35年まで主としてベルン大学で、ドイツ文学、イギリス文学、歴史学、スイス史学を専攻した。1934年、当時ベルン大学教授であったヘルムート・デ・ボアのもとで学位論文『昔話と伝説における贈り物—両形式の本質の把握と、本質的差異に関する研究』で学位を受け、それを1942年に出版。1947年『ヨーロッパの昔話』を発表。
- 『昔話と伝説』(1961年) 他、シェイクスピアに関する著作もある。現在はチューリヒ大学教授としてヨーロッパ民間伝承文学を講じている。(『ヨーロッパの昔話』訳者あとがき参照)
- (6) マックス・リュティ『ヨーロッパの昔話』岩崎美術社、2000年(4版)、p.147
- (7) 小澤俊夫『昔話の語法』福音館書店、1999年(初版)
- (8) ウラジミール・プロップの主著『昔話の形態学』(初版、1928年) 水声社、5,500円、訳者は本書について大要次のように書いている。本書は、「スターリニズム」が確立して行く過程で、芸術が厳しく規制されてゆく不幸な時代に書かれたため、ほとんど三十年間無視されたままであったが、レヴィ=ストロースの神話理論に関連して思い出され、瞬く間に数か国語に翻訳されただけでなく、六十年代の半ばには、「説話学」なる学際的分野が成立する祭にその始祖となるという劇的な運命を経験した書である。民話・神話・物語などの記号論的研究における第一の古典となっている。

(9) 同上。pp.31-40 参照。

心理学からの貢献

- (1) 前掲書、『初版グリム童話集①』序文、p.11
- (2) B・ベッテルハイム『昔話の魔力』評論社、1999・1・20（第15刷）
- (3) M・Lフォン・フランツ『おとぎ話の心理学』創元社、1986・2・10（第1版第6刷）
- (4) 同上。p.47
- (5) 同上。p.21
- (6) 同上。pp.49-57 参照。
- (7) 前掲書、『初版グリム童話集①』序文 p.12
- (8) ヴェレーナ・カーストは『おとぎ話にみる家族の深層』（創元社、1989年）概論 pp.3-10 参照、引用。
- (9) 同上。pp.7-10 参照。

おわりに

- (1) 前掲書、ドイツロマンは全集15『グリム兄弟』pp.139-157
- (2) 同 p.157